

中国プイ族における靈的職能者プモとその儀礼

— 貴州省大寨村班世顯氏の事例から —

余志清 (Yu Zhi Qing) ※

はじめに

本稿は貴州省貴陽市花溪区大寨村に住むプモ、班世顯氏に注目して、彼が執行している儀礼を観察し、また彼による儀礼解釈及び用いられているテキストを分析し、プモとしての彼の儀礼の全体像を明らかにすることを試みる。これらの作業を通して、プモの儀礼の体系や特徴などを整理し、漢族の信仰の受容はプイ族の信仰にどのような影響をもたらしたのかを考察し、その意味について検討することを目的とする。

一 プイ族における靈的職能者

中国55の少数民族の一つであるプイ族は、人口が297万で、主に貴州省に居住している。貴州省の省都である貴陽市の周辺はプイ族の集住区の一つである。この区域のプイ族は、漢族と接触する機会が多く、社会的・文化的に大きな変動を被っていて、プイ族の中でも特に「漢化」が進んだ人々として知られている。プイ族の民間信仰の様相は極めて複雑で、これに関わる靈的職能者の実態を把握することは容易ではない。発表者は自らの調査体験に基づき、靈的職能者をプモ、陰陽先生、ミナの三つに大まかに分類する。

1 プモ

プイ族の各地域には葬送儀礼の超度儀礼などの儀礼を担当する専門的な祭司—プモがいる。プモはプイ語で、「プ」は「人」、「モ」は「読む」という意味であり、「経を唱える人」を意味する。プモはより一般的な名称として研究者に用いられているが、各地における名称は多様で、貴陽市周辺では漢語で「土先生」・「鬼師」・「巫師」・「魔公」と呼ばれることが多い。

プモは男性で、葬送儀礼のほか、厄除け・病氣治療・子授けなどの儀礼も行なう。儀礼の司祭者である一方、村で高い信望を集めており、日常のもめごとを仲裁する役割も担っている。

プモの継承には特別な規定はなく、師事すると経文と儀礼のやり方を学ぶことができる。一人前のプモになるには師による試験を経なければならないが、それは36歳を過ぎて、36の「関門」を通過してからのことである。プモは村の若い男性をできるだけ多く集めて教えるが、殆どの人が興味がなかったり、覚えるのが大変であると感じて脱落し、結局プモになれるのは1人か2人しかいない。プモの羅天富によれば、プモの術業を修得できる人には、単なる記憶力がよいとか、まじめだとかという問題だけではなく、何らかの「徳行」がついているという。

※筑波大学外国人研究員

かつてプモはプイ族社会の知識人であると同時に、漢文化の知識を最も多く有する人たちでもあった。現在、貴陽市周辺のプイ族の若い世代にはプイ語を話せる人が少なくなり、かえってプイ語が話せることがプモになるための条件となっている。

各儀礼を行なうとき、プモは相応するテキストを唱える。テキストはプイ語テキストと漢語テキストに分けられる。

プイ語テキスト（摩経）

文字を持たないプイ族は、漢字を借りてプイ語の音声を表記し、経文だけに使う文字記号を作った。文字記号は漢字及び漢字の部首を借用して作った模造漢字に分けられる。これらはプイ語に近似した音調しか記録することができないが、記憶だけに頼らず、間違いと遺失が避けられるため、比較的安定した形で経文を今日まで伝えてきたと考えられる。

文字記号には主に以下三つの特徴がある（周 1995）。

- (1) 漢字の発音を借りて、プイ語を表す。
- (2) 漢字の意味を借りて、プイ語を表す。
- (3) 漢字の偏旁を借りて、漢字六書の形声法のように、新たな模造漢字を作る。

貴陽市周辺のプイ語テキストは、模造漢字の割合が低く、殆ど本来の漢字で表示されている。また、一つ単語を書くとき、漢字の意味を借りるのか、発音を借りるのかが自由である。たとえば「吃」（食べる）という字は、プイ語でゲン（「更」）と発音するから、「吃」と書くか、「更」と書くかは自由であり、「吃」と書いても、「更」（ゲン）と発音する。

プモが漢字で経文を記録したのは明・清以来のことであるが、口承としてのプイ語テキストはすでに唐もしくは宋の時代に成立していたと考えられる。明清時代、漢文化の浸透に伴い、漢語漢文を習得した人が増えていたため、プモが漢字でテキストを記することは各地で行われていたと考えられる。

プイ語テキストの大半は葬送儀礼で使われる「ピンワン（超度）経」である。また、葬送儀礼以外の儀礼で使われる漢語テキストのプイ語版も数多くある。

漢語テキスト

各儀礼を行うときに唱える漢語のテキストは「○○科文」と呼ばれている。科文には儀礼で招く神々の「位牌」の書き方や、儀礼を行うときの注意すべきことや作法なども書かれている。また、「関煞大吉」、「看病吉凶」などのテキストを使って病気や不幸の原因をつきとめ、それに相応する儀礼を行う。

2 陰陽先生

陰陽先生は「地理師」・「風水先生」・「勘輿」などとも呼ばれている。またプイ語では「パォヤー」という呼び方もある。調査地においてはプモが陰陽先生を兼任するのが殆どという状況であったが、専門的な陰陽先生もいるため、単独の分類をする必要があると考えられる。葬送儀礼で使われる「ピンワン経」にはプイ族が墓地の風水をみてもらうために陰陽先生に頼

む内容があり、当初は漢族の陰陽先生に頼んでいた。その後プイ族にも陰陽先生の知識を習得する人が現れ、多くは漢文化の知識を持つプモが兼ねるようになったと考えられる。

陰陽先生の役割は死者とその息子の八字（農曆の生年月日時の干支）によって埋葬期日を選定し、陰陽五行説に基づいて墓の地相をみることである。また、結婚式や家屋の建築のとき吉日と地相をみる。運命判断なども行う。同じ村の陰陽先生に頼むのか、また他の村の陰陽先生に頼むのかは自由で、漢族の道士に頼んでも構わない。また、本稿が取り上げた班世顕氏の場合、彼は陰陽先生として、しばしば近くに住む漢族にも頼まれている。陰陽先生は羅盤と『通書』・『風水大全』・『地理五訣』などの本を使って風水をみる。『通書』は公式の出版が禁止されていたため、民間の印刷物が多く使われている。『通書』は年ごとに刊行され、その年の「命相」が記されている。

3 ミナ

プイ族において、プイ語で「ミナ」または「ヤー」、漢語で「神婆」と呼ばれる女性のシャーマンがいる。その儀礼は病気治療や子授けなどの他、運命判断、占いなども行う。プイ族のミナは降神巫が殆どで、巫病にかかったら、「ドォヤー」という神が憑依したとみなされ、家で祭壇を設け、儀礼を行う（周 1995）。現在、ミナの数はかなり減っており、また政府に迷信として活動を禁じられているため、その調査は容易ではない。発表者はミナを直接に調査することができなかったため、その具体的な状況や儀礼の作法については不明である。プモの班世顕氏が持っている葬送儀礼で読まれる「モ・カォ」という「ピンワン経」には、死者の息子がミナに親の病気の原因を尋ねる経文がある。その経文の内容は次の通りである。ミナが服で頭を覆い、トランス状態に陥り、36の門、36の窓を通過して、死者の先祖たちに会い、病因を聞いてきた。ミナは、その原因は息子がいろいろな悪夢をみたからだと伝えたため、息子は沢山の方法を使って悪夢を改めようとしたが、結局役に立たなかったという。

話者の話によると、病気治療の場合、依頼者が持ってきた卵と米を観察して病気の原因をつきとめるのだという。調査地のプイ族は、漢族やミャオ族のシャーマンも「ミナ」と称し儀礼を依頼している。そのミナが何族に属しているかということよりも、むしろミナ自身の効果と名声を重視し儀礼を依頼しているのである。例えば、鎮山村の場合、清代からすでに村内にプモがいなくなったため、殆どの人々はミナに病気治療などの儀礼を頼む。この村には一人のミナがいるが、村人は彼女には依頼せず、多くの場合は他の村に住む一人のミャオ族のミナのところへ行く。その理由について、話者の班さんは、同じ村のミナが供物とかを使用する場合、いつも高い物を要求し、依頼者にとっては負担となっているが、ミャオ族のミナは依頼者の経済状況も常に考えてくれるし、名声も高い、と説明している。

霊的職能者は以上のように分類することが可能であるが、実際に病気治療などの儀礼からみると、かなりの重複部分が見られ、儀礼や役割などを明確に分類することは困難である。一方、依頼者からみると、プイ族の場合、ミナと陰陽先生への依頼は民族の枠に関係なく行われるが、

他の民族がプイ族のプモに頼み、その儀礼を行ってもらうことは殆どない。

以下において、プモの班世顕氏に焦点を当て、彼のライフヒストリー、テキスト、儀礼体系などについて考察し、プモの儀礼の全体像を明らかにすることを試みる。

二 班世顕氏とその儀礼

1 班氏のライフヒストリー

貴陽市花溪区大寨村に住む班世顕氏(写真1)は1941年生まれで65歳である。その家系においては5代続いてプモがいる。初代のプモである班正達氏が活動したのは清朝の康熙時代(1662-1722)であり、当時すでに漢字を借用してプイ語のテキストを記録していた。班氏が現在使っているプイ語のテキストの多くは光緒15年(1890年)前後の版であり、そのときの改版によって、文章が一層流暢になり、覚えやすくなったという。貴陽市周辺において、班家のような長い伝統をもつプモの家は殆どないといえる。その伝わってきた数多くのテキストの中で、プイ語のテキストが量、種類共に豊富である一方、漢族から受容したテキストもかなりの量をしめている。



写真1 清水碗に咒文を書く班世顕氏

班世顕氏は5歳から私塾で漢字を学び、10歳から小学校にいらした。11、12歳頃から父親や

叔父の儀礼をそばで見学したり、手伝ったりしていた。本来プモは36歳になってから独立するのが一般的だが、班氏の場合、18歳のとき父親が亡くなったため、19歳から早くも自分で儀礼を行っていた。25歳のとき小学校の先生になったが、出身家庭の問題でやめさせられ、それから農業を営んで生活してきた。文化大革命中は、叔父たちと一緒に「思想改造」のため設けられた「学習班」に行かせられ、さらに儀礼用テキストの大半が没収され、活動も厳しく禁止された。

班氏が本格的に儀礼の作法を学び始めたのは文化大革命の終息後のことであった。希望した学校の先生を諦めざるを得なかった班氏はその後、散逸していたテキストを収集し、古くなって傷んだテキストを新たに写したり、儀礼の作法や経験を整理したりすることにも努め始めた。母方の祖父が陰陽先生であるため、彼から陰陽先生の作法も習得した。また、班氏は親族内のプモのみならず、周辺に住む何人かのプモからも儀礼の作法などを積極的に学んでいた。

現在、班氏は優れたプモまたは陰陽先生として人気が高く、大寨村の人々からは「賢士」として尊敬されている。また、地元の村だけではなく、周辺のプイ族からの依頼も多い。さらに、近くに住む漢族からは、家屋の建築の吉日や地相の鑑定、引越しの吉日を見ることなど、陰陽先生としての仕事を依頼されることも少なくない。しかし、体が弱いため、大きな儀礼になると、断る場合もある。

2 班氏が執り行う儀礼の分類

まず、プモとしての班氏が行っている儀礼を大まかに次のように分類しておく。

① 死者儀礼

- a) 超度儀礼 プイ族の超度儀礼とは、プモにより執り行われ、死者の靈魂を祖先の發祥地へ案内し、そこから祖先のいるところ（「祖先界」）へ導く役割を果たす儀礼の総称である。
- b) 大超度儀礼 プイ族は祖先界と別に、「遊魂界」（「枉死城」ともいう）という非業の死を遂げた者がいる他界が存在すると信じている。非業の死を遂げた者に対しては、プモが2回の「超度儀礼」を行なう。1回目は「スイトウ」という儀礼で、家の外で行われ、死霊がプモによって「遊魂界」から取り出される。途中刀の山、火の海、血の川を渡らせてやらなければならない。2回目は家で普通の死者と同じく「超度儀礼」が行われ、取り出された死霊を「祖先界」に帰らせる。儀礼の手順は複雑で、1日がかりで行われる。
- c) 解煞儀礼（厄除け） 解煞儀礼とは「神煞」を斬り、災いを追い払う儀礼である。「神煞（殺）」とは癘鬼、悪霊のような凶悪な存在で、人に災いをもたらすとみなされる。「神煞」には様々な種類があり、プモは死者が死んだその日時によって「神煞」の種類を判断し、相応する儀礼を行う。死者儀礼の場合の「神煞」は「崩煞」・「口舌煞」・「鳥鴉煞」・「^{からす}勾絞煞」・「重喪煞」・「天火地火煞」などがあり、追い払わないと死者の家族に災いをもたらす恐れがあるという。出棺前後で行うのが

多い。

d) 安靈儀礼 位牌を神棚に収める儀礼である。

② 病氣治療儀礼

a) 解煞儀礼 「神煞」は生きている人の病氣の原因ともみなされる。病氣治療儀礼の大半は解煞儀礼であり、その場合の「神煞」の種類は「冷煞」・「五道傷亡煞」・「白虎煞」などがある。プモが『看病吉凶』などのテキストを使って病因となった「神煞」をつきとめる。

b) その他の病氣治療儀礼 病氣の原因はまた他にもある。例えば皮膚にできものが生じた場合、その原因は「ヤンム」という毒が入った水に触れたためであるとされ、「ヤンム」を払う儀礼を行う。また、先祖の祟りを病因と判断することもあり、その際、祟りを取り除く儀礼を行う。

③ 穢れ除け

a) 掃火星 新築やリフォームの際に行う儀礼で、家を清め、火事を防ぐ。昔は村全体を清める儀礼も行っていた。

b) 掃牛欄 家畜小屋を清める儀礼で、家畜の疫病を防ぐ。

④ 謝土

a) 謝山土 墓地や墓石を建てる時に行う儀礼で、「陰間」(冥界)で住むことになった死者のために、「地府神君」に一つの敷地を買う儀礼である。

b) 謝家土 家を新築及びリフォームした時に行う儀礼で、上面を掘ったことについて、「地府神君」にお礼を言う儀礼である。

⑤ 子授け儀礼 それには2種類の搭橋儀礼(橋を架け渡す儀礼)がある。

a) 外橋を架け渡す。溝や小さい川に橋を架け渡し、橋を渡る人が多ければ多いほど依頼者の功德が積まれ、子供ができるという。

b) 家橋を架け渡す。竹で橋を作り、刺繍で出来たヒョウタンや瓜、果実を掛けるが、それは子孫が多いという意味を象徴するという。その橋を夫婦の寝室に置く。

⑥ 生命強化儀礼 夜泣きや身体が弱い子供のための儀礼である。

a) 過関 聖母娘娘に願掛け、子供に36の関門を通らせる。

b) 家橋を架け渡す。⑤のb) とほぼ同じ作法であるが、ヒョウタンや瓜などの掛け物は使わない。橋は子供の寝室に置く。

3 儀礼で使われる法具と品物など(写真2)

ここで、班氏の解釈に基づいて、儀礼で使われる法具と品物などについて紹介する。

a) 祭壇 祭壇は普通依頼者の家のテーブルを使って正庁に設けられ、テーブルの上に米を盛った枱を載せ、そこに線香、蠟燭などを立て、道具や供物を配置する。善い神々を迎えて儀礼を行う際は、テーブルを神棚に面して設置し、悪い神々を迎える

際には庭に面して設置する。

- b) 符章 道教儀礼から受容したものである。道教儀礼の場合は「符」とよばれ、広く民間宗教の儀礼に伝えられている。黄色の紙に、文字や様々な象徴的な符号が書かれており、「神煞」などを鎮圧し、災いを追い払うなどの目的で多くの儀礼で使われている。

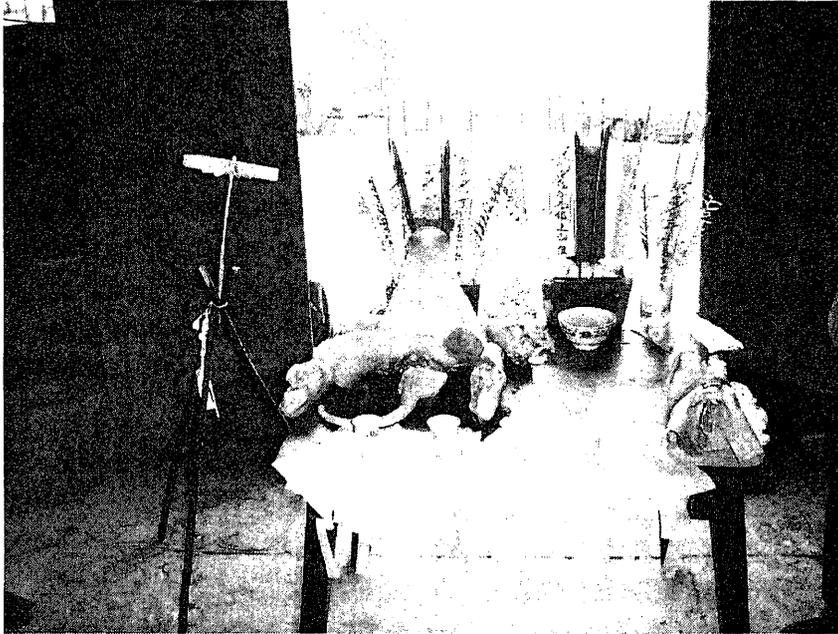


写真2 祭壇

- c) (神の) 位牌 符章と同じサイズの紙であり、儀礼で迎える神の名前が書かれている。殆どの儀礼で用いられている。位牌は黄色、赤、緑の三種に分けられ、善い神は赤で、悪い神は黄色で、両者の中間に立つ神は緑を用いる。
- d) 八卦 道教や漢族の民間信仰の場合は「筭」とよばれているが、班氏が「八卦」と呼んでいる。班氏が持っている八卦は牛角で作られ、二つを以て一對と為し、片面が平(陰)で、片面が丸い(陽)。真中から割った筭の形をイメージして作られたという。各儀礼で招いた神々は土地神によって迎えられ、八卦は土地神の神意を伺うときに投げる。班氏が「請土地神歌」と唱えながら八卦をテーブルに投げ、うまく陰陽と出れば、土地神が願いを聞き届けたとされる。八卦は殆どの儀礼で使われている。
- e) 藁人形 依頼者のかたしろとして用いられる。班氏が前もって作るが、儀礼を行う

前に、依頼者の上着を切って作った服を藁人形に着せる。

- f) 草の束 「バマン」という草の束で、神煞や邪気を追い払う道具である。
- g) 藁の輪 藁で括った輪で、神煞などの穢鬼が人に災いをもたらす道具や、人の罪などを表し、それが解けることによって、人が災いから解放されるという。
- h) 着物 依頼者の普段着や帽子などで、病気治療などの儀礼の必需品である。
- i) 線香 線香を焚くことは「上香」といい、線香の煙が神々に通じるとされている。
- j) 紙標（白い切紙） 神々への案内状である。
- k) 紙銭 紙銭を焼いて神々にささげる。
- l) 雄鶏 雄鶏は霊力を持つ動物と見なされ、供犠として殆どの儀礼で用いられる。特に魂を呼び戻す場合には欠かせない。
- m) その他の動物 犠牲としてよく使われるのが豚と牛で、その頭と足を用いて、豚あるいは牛であることを示す。また犬、山羊、鶯鳥なども使われる。

4 儀礼の基本手順

儀礼によって異なるところもあるが、基本的な手順を整理してみる。

- ① 祭壇を設け、先師を迎える。 儀礼を無事に成功させるため、各領域の先師の加護を祈る。「請師呪」を読み上げる。先師は次の通りである。

仏・道・巫門壇上先師、鬼谷先師、北方真武祖師、達摩祖師、大法王、化身化_菩薩、陰陽伝教先師、恩師萬法教主宗師、歴代祖師

師父、師母、師弟、師兄、羅公経文先師、班公如凌先師、尋師訪友先師、道門老先生

陳法道王洞玄、王茹臣、王志靈、王道源、王恵明

- ② 土地神を迎える〔3のd)の「八卦」を参照〕。土地神を迎えるときに唱える「請土地神歌」は漢語版とプイ語版と両方を有し、班氏は儀礼の内容と依頼者の状況に合わせて、プイ語版のみを唱えるか、両方唱えるかを判断する。
- ③ 読経 その儀礼に相応する経文を読み上げる。
- ④ 領牲 それはその儀礼で迎える神に犠牲をささげる儀礼で、犠牲を殺し（あるいは殺す振りをし）、神々にそれを受け取るよう願掛ける。
- ⑤ 回熟 回熟は肉を煮て再びテーブルに戻すという意味である。神々に肉はすでに煮たので、食べてくださいと告げる。各経文の「回熟文」の一節を読み上げる。
- ⑥ 送神 神を送り返す。
- ⑦ 送師取壇 先師を送り返し、祭壇を撤去する。

以上は、各儀礼に共通する基本手順であるが、実際には、それらの儀礼ごとに異なる部分もある。例えば「解煞」儀礼の場合、土地神を迎える前に、「水（祭壇）を清める」儀礼が行われ、祭壇を撤去した後、神煞を外に追い払う儀礼が行われる。その後、村の辻道でさらに神煞を追

放する儀礼が行われる。

5 『喪事備要・解煞須知』からみた班氏の儀礼経験

1994年秋、班氏は死者儀礼の中の「解煞儀礼」について整理し、『喪事備要・解煞須知』というテキストをまとめた。それらの解煞儀礼は極めて危険性を持つ儀礼で、死者の家族に一族絶滅や病気などの危機をもたらすのみならず、凶悪の神煞が多いただけに、プモにも悪い影響をもたらす恐れがあり、時には命までが奪われることもあるという。これまで、先師たちは儀礼の経験を口承で伝えるのみで、決して文章化することは無かったが、班氏自身は後人に伝えておきたいため、「仕方なく漏らしてしまう」とテキストをまとめた目的を説明している。

テキストの前半は各解煞儀礼の経文や符章・位牌の様式、作法などが書かれている。特に儀礼の作法は他の儀礼のテキストよりも詳しく説明している。テキストの後半は、何人かの先師と彼自身の解煞儀礼の経験談である。その経験談は次のように整理することができる。

- ① 神煞の大小を問わず、儀礼の手順をそろえなければならない。プモは自ら言動を慎み、他人との雑談などを禁じ、参列者にも静粛にすることを要求する。
- ② 儀礼を手伝う人を選ぶとき、真面目な人を選ぶこと。
- ③ 解煞儀礼で使われた品物を移動する場所などは自分で決める。そして品物を全部焼いてしまうまではその場を離れないこと。
- ④ 雄鶏などの供物は目的に応じて用い、同じ供物は2回以上使わないこと。
- ⑤ プモと依頼者の間に信頼関係がないと、儀礼は成功しない。
- ⑥ プモは能力相応の儀礼を行うこと。身のほど知らずに強引に行った場合、依頼者にも悪影響をもたらす。儀礼を行うときには、自分の身を守ることを心掛ける。

以上の経験について、彼は先師と自分の幾つかの失敗例を挙げている。またテキストの最後に「請師呪」にも挙げられている羅公経文、班公如凌などの先師についての評価を書いた。班氏はかつてプモには家庭裕福、子孫繁栄の人は少ないと言っていた。それはプモが様々な凶悪な神煞を相手にしており、儀礼によって鎮圧した神煞もいれば、服従しない神煞もいるからだという。「だから今はプモになりたい人が少ない」と言っていた。

「神煞」について、班世顕氏は現実社会の匪賊、強盗と同じような存在であると喩える。他人が財物を持つのをみると、自分のものにしたがる。その目的が達成できないと、いろいろな手段を使い、災いをもたらす。「神煞」は陰界では正式な職務を持たない「孤魂野鬼」であると解釈している。

「解煞儀礼」は、漢族から受容した儀礼であるということができる。まれであるが、大寨村周辺の漢族が班世顕氏に頼み、「解煞儀礼」を行ってもらうこともある。それについて、班世顕氏は儀礼の作法などは、「プイ族の依頼者のために行うときと同じで、ただプイ語を使わないだけ」と説明している。「解煞儀礼」は、班世顕氏の儀礼の中で重要な位置を占めている。

6 事例

ここで、班氏が2004年8月28日に龍灘村で行った儀礼を事例として提示したい。

龍灘村の羅さん(25歳)の奥さん(22歳、以下は依頼者と記する)が妊娠5ヶ月で、羅さんの父親が妊婦と胎児安全の儀礼を依頼した。班氏は羅さんの奥さんの八字をみ、「陽刃煞」・「飛刃煞」などの神煞が付いていると判断し、解煞儀礼を行った。また、胎児のための「橋を架け渡す」儀礼も行った。

解煞儀礼

「陽刃煞」・「飛刃煞」などの神煞は極めて凶悪で、追い払わないと妊婦が出産中に生命の危機があるとされる。儀礼の手順は次の通りである。

- ① 祭壇を設ける。祭壇は庭に面して設けられる。祭壇には符章、位牌、線香、蠟燭、藁人形、草の束、藁の輪、豚の頭、依頼者の服などが置かれる。「陽刃煞」・「飛刃煞」は武将とされるため、祭壇には軍旗を表す旗、軍隊の天幕を表す竹の三脚等を加える。また今回は依頼者の代わりに神煞の加害をうけるために、豚、山羊、鷺鳥、雄鶏などの犠牲を用いる。
- ② 先師を迎える。班氏は紙銭を焼きながら、「請師呪」を読みながら、祭壇の先師を招き寄せる。
- ③ 水を清める。班氏は三本の線香を焚き、それを持って、清水碗の上で、水を清めるための咒を書く。また白い紙標がつけられた刃物と、焼いた紙銭でそれぞれ水面に咒を書く。こうして清水に靈力を加える。紙銭の灰は清水に入れる。
- ④ 班氏は依頼者夫婦を祭壇に背を向けて座らせ、左手に水の入った碗をもち、右手に依頼者の服を持ち、水を口に含んで噴出し、パイ語で神々にこれから儀礼を行うことを告げる。
- ⑤ 土地神を迎える。今回はパイ語版の「請土地神歌」を唱えた。
- ⑥ 「解退陽刃煞・飛刃科文」の経文を唱える。「解退陽刃煞・飛刃科文」のパイ語版と漢語版の両方を交替で唱える。
- ⑦ 領牲 山羊、鷺鳥、雄鶏を殺す。
- ⑧ 二人の手伝う人が敷居の外側にたち、一人が紙銭を焼き、一人が12の輪で結んだ藁の輪を解いて焼く。班氏は「解罪惡」の1節を唱え、依頼者の背負っている罪業を取り除く。
- ⑨ 回煞 山羊、鷺鳥、雄鶏を敷居の外側に置き、焼いた紙銭の火にあてる。班氏が「回煞文」を唱える。
- ⑩ 山羊、鷺鳥、雄鶏の足と口先を切り、赤・緑・黄色の紙に包む。祭壇に載せる豚の足と口先も紙に包む。
- ⑪ 祭壇にある黄色い符章・三脚などのものを箆に移し、祭壇を撤去する。班氏は左手に清水碗をもって、右手で草の束をもち神を外に追い出す。水を敷居の外側に沿って撒く。
- ⑫ 班氏と依頼者の父親などが再び近くの山の平地に祭壇を設ける。班氏は「山上設壇」の

1節を唱える。紙に包んだ動物の足と口先を埋める。三脚、符章、藁人形、旗などを焼いていく。

橋を架け渡す儀礼

胎児のために「家橋」を架け渡し、「聖母娘娘」の加護を祈る儀礼である。聖母娘娘は道教の女神の名前であるが、班氏はパイ族の女神「リャリヤマ」と同一存在であると説明している。聖母娘娘は12人もいるとされ、中の花林聖母、花王聖母などの位牌は赤い紙で作られるが、関煞聖母の位牌は緑の紙で作られる。橋は一般的に胎児または赤ん坊の時期に作られ、寝室に掛けられる。その後その子供が病気や夜泣きなどをし、「過関」儀礼を行ってもらう場合、その橋を祭壇につける。儀礼の手順は次の通りである。

- ① 祭壇を設ける。祭壇を神棚に面して設け、当日の朝作られた橋をつける。また、祭壇には米を盛った枡、位牌、線香、蠟燭、豚の頭、依頼者の服、紙人形などを置く。
- ② 土地神を迎える。班氏が「請土地神」を唱える。聖母娘娘に神煞がすでに追い出されたので、これからこの子を加護するようにと願を掛ける。
- ③ 経文を唱える。
- ④ 領牲 雄鶏を殺し、聖母娘娘にささげる。
- ⑤ 回熟 鶏に熱湯をかける、毛を取り除き、皿に載せ、祭壇に置く。班氏が「回熟文」を唱える。
- ⑥ 「造橋」の1節を唱える。
- ⑦ 胎児の魂を呼び戻す。羅さんの母親が祭壇の左側に座り、一掴みの米を手にとり卵を上に乗せて胎児の魂を呼び戻す。魂が帰ってくると卵が動くという。班氏は「叫魂経」を唱えながら五色の切紙をつけた細い竹竿を持ち、その切紙で枡に刺された紙人形をとる。
- ⑧ 切紙などを橋に飾り、橋を寝室に移す。紙人形を寝室の壁に貼る。

三 プモ儀礼からみるパイ族の「漢化」

1 プモ儀礼に関する先行研究

プモに関する先行研究の中で最も大きな成果としてあげられるのは周国茂の『摩教和摩文化』(周 1995)であろう。周はプモと「ビンワン経」の存在から、葬送儀礼の「砍牛」(牛たたき)などの事象に代表される民俗をパイ族の民族宗教—「モ(摩)教」であると位置付け、その発生の背景(古代国家との関連)、基本的観念と内容、諸神の系統・経典・儀礼などから分析している。プモや「ビンワン経」などの用語の規定や、儀礼や「ビンワン経」などの分析はパイ族研究に大きな影響を与えているといえる。しかし、彼の研究に対しては幾つかの議論の余地があると考えられる。

- ① 地域偏差への考慮の欠如 周はパイ族全体を対象として考察して結論づけている。実際彼が提示した経典の内容や儀礼などの分析からみると、貴州西南部などの「漢化」の度

合いがより低い区域の事例が多く、発表者の調査地である貴陽市周辺の事例との相違が多く存在する。

- ② 「漢化」への検討の欠如 彼は「モ教」の中の外来文化について検討するとき、漢文化、道教、仏教の影響と分けて分析している。「モ教」への漢文化の影響について、「その影響は主に漢字の借用と祖先崇拜（漢族の神棚の様式とほぼ同じであること）、または風水観念などが挙げられる」と述べることに留まっている。道教についても、「その影響は主に『仙界』の観念の受容、張天師・太上老君などの神々の受容、また符章などの借用である」と述べている。実際貴陽市周辺では、漢族の民間信仰や道教の影響は、彼が述べている観念など要素のみならず、儀礼の構造や実践など、各方面において看取される。また、彼は班氏の儀礼の中で重要な位置を占めている「解煞」儀礼について一切触れていないが、彼が調査を行った区域でその解煞儀礼は全く行われていないとは考え難いのである。解煞儀礼の手順と作法は劉枝萬の『中国道教の祭りと信仰』の中で記述されている台湾漢人の収魂儀礼とほぼ一致しており（劉 1984）、漢族から導入した儀礼であると考えられるが、周はこのような儀礼をプモの儀礼から排除したのかもしれない。
- ③ 民族宗教という位置付けについて 周は「モ教」概念を用い、プモとその儀礼をプイ族の民族宗教とし、「ビンワン経」が伝承されている地域において、「プモを中心として全民がモ教の信者であるということが出来る」としている。さらに「モ教」を「一種準既成宗教として、鬼魂観念と冥界観念を信仰の基礎とし、祖先崇拜を中核とし、病氣と苦痛から解脱することと極楽世界へ達することを宗旨とする宗教である」と規定している。また、彼は「パオルト」というプイ族の神をモ教の創立者としているが、「パオルト」はプイ族に「造化の神」として祭られているものの、現在貴陽市周辺のプイ族の中では、「パオルト」を知っている人は少なく、さらに班世顕氏は「パオルト」は実は道教の最高たる神である「元始天尊」とは同一存在であると解釈している。

本稿ではプモの班世顕氏を取り上げ、彼と彼の儀礼の全体像をみてきたが、それは周の「モ教」の規定と必ずしも符合しないといえる。

一方、鳥居龍蔵は明治29年から35年の間に、貴陽市周辺で苗族（ミヤオ族）の言語・風俗・習慣などについて調査を行った。そのとき貴州省の非漢民族をすべて「苗民」とされていたため、プイ族も「仲家苗」とよばれていた。鳥居龍蔵はプイ族を含めたこの区域の「苗族」の宗教について、「余ノ訪問セシ苗族ハスデニ固有ノ宗教ヲ失ヒ、多クハ仏教ヲ信ジ且ツ幾分カ道教化セナシ…」と述べている（鳥居 1926）。しかし、凡そ百年後の現在においても、この区域のプイ族はいわゆる「固有の宗教」を失ったとはいえないのである。一見彼らの儀礼の中には漢族的な要素がたくさん取り込まれているが、それでも彼らは漢族に吸収されることなく、独自の儀礼体系を維持してきたといえる。

2 プモ儀礼からみるパイ族の「漢化」

まず、本稿はプモとその儀礼をパイ族の民間信仰と位置付け、考察していきたい。民間信仰という用語を用いることによって、より広い視点からパイ族の信仰を動的に考察することが出来ると思う。以下において、プモの儀礼を「漢化」の問題を中心に検討する。

プモ儀礼にはたくさんの外来の要素が取り込まれているが、特に道教の色合いが濃いといえる。それは「漢化」によってもたらされた結果であると考えられる。しかし、彼らは漢族に吸収されることなく、独自の儀礼伝統を維持してきたのである。

パイ族が独自の儀礼体系を維持できたのは、彼らが漢文化を導入する際、常に自らの工夫をもって漢文化を再解釈、再構成して利用しているからである。結果として、彼らは漢族に吸収されるのではなく、漢族から導入した要素をその民間信仰の中に消化してしまうのである。

プモは道教などの儀礼の思想・構造・作法などを積極的に導入することによって、プモ儀礼の体系を整えてきたといえる。例えば、道教の最高神である「元始天尊」を「パオルト」というパイ族の「造化の神」にあてることや、道教の女神「聖母娘娘」をパイ族の女神「リヤリヤマ」にあてることなど、外来の神々の威力を受け入れ、従来の神々の力に重ねることで、神の加護する力を強化しようとしている。

また、班世顕氏は自己認識のアイデンティティとして、自らは「道教に属するが、巫教である」と主張している。それは道教を規範としてそれに近づこうとする態度ともうかがわれる一方、やはり道教ではなく、独自の信仰であるという認識をもっているともいえよう。

おわりに

本稿では大寨村の班世顕氏とその儀礼を事例に、パイ族の霊的職能者プモとその儀礼について分析し、パイ族の民間信仰における「漢化」の特徴について検討した。本稿では経典の詳細に触れることができなかったが、班世顕氏が保有するテキストをみると、同じ儀礼で読み上げる経典はパイ語と漢語の両方を有するものが多い。それについて、班世顕氏は「まず、パイ語の経典ができて、そしてそれを漢語訳したものができた」と主張し、漢族からの直接な影響を認めないように窺われる。彼は、パイ語と漢語のテキストの運用について、依頼者がパイ語がわかるかどうか、またその儀礼において招く神の性格などをみて判断するという。経典からみた「漢化」についてさらなる分析の余地がある。

また、今後同じ地理空間に住む漢族の儀礼の調査を行い、パイ族の民間信仰と漢族の民間信仰との類似性と連続性について提示していきたい。

参考文献

- 鳥居龍蔵 1976[1926]「人類学上より見たる西南支那」
『鳥居龍蔵全集』 第10巻 朝日新聞社 pp.219-521
- 劉枝萬 1984『中国道教の祭りと信仰（上、下）』 桜楓社

- 竹村卓二編 1994『礼儀・民族・境界——華南諸民族「漢化」の諸相』 風響社
周国茂 1995『摩經和摩文化』 貴州人民出版社
古家信平 1999『台湾漢人社会における民間信仰の研究』 東京堂出版
野口鉄郎他編 2001『アジア諸地域と道教』 雄山閣

学界消息

中国民俗学会・北京民俗博物館 主催
『文化空間：節句と社会生活の公共性』

去る2月9～11日、北京市朝陽区政府後援、中国民俗学会・北京民俗博物館主催で『第三回「東岳論壇」国際シンポジウム』が開かれ、中国本土以外、日本や韓国、アメリカ、ロシア、ドイツ、ブラジル、マダガスカル及び台湾などの国や地域から研究者が集まって、講演や研究発表を行なった。

「東岳論壇」は、中国民俗学会事務局、北京民俗博物館の所在地が東岳廟（東岳とは泰山のことで、この廟は北京市内に現存する唯一の泰山信仰関係の廟）にあるために名付けられ、2005年に発足したものである。その背景は近年、経済の成長や政府の諸改革が進み、人々がそれまで軽く見られていた民族・民俗文化への関心を高めつつ、とくに韓国江陵の「端午祭」がユネスコ世界無形文化遺産として申請・登録されたことが研究者や一般民衆にはもちろん、政府にも大きな刺激を与え、民族・民俗文化の価値を見直す機運となったのである。

この国際シンポジウムは、第一回が旧正月頃に開かれて以来、毎年同じ頃に開かれるようになり、今回も旧正月の直前に開かれた。一回目のテーマは『民族国家の暦日—伝統節日と法定休日』であり、2006年も引き続きこのテーマについて違う角度から討

議した（二回目の詳細については、本誌第20号の佐野の報告参照）。この二回のシンポジウムは、実に大きな成果を収め、それぞれの報告集が出された。さらに、社会的にも反響が大きかった。まさに研究者たちへ呼応するように、最近では政府の政策及びその実施状況の審議や国の立法などにかかわる「全国政協」（全国政治協商会議）、「全国人大」（全国人民代表大会）の議員たちが中央政府に伝統文化政策の改善を求め、「春節」（旧正月）、「清明節」、「中秋節」を公式に国民祝祭日に定めるよう提案をしたりして、大きな議論を起こした。

今回のシンポジウムのテーマは、『文化空間：節句と社会生活の公共性』であり、前二回のテーマの延長線上で空間的・時間的・社会的な角度から節句の研究を展開し、三十数人の研究発表が行なわれた。日本からは、佐野賢治先生が外国研究者代表として開会挨拶をしたほか、「現代社会と民俗学—民俗学から世界常民学へ—」の題で研究発表を行なった。この発表は、大きい枠組から時間的・空間的・社会的文化伝統を捉え、論理性が高いので、大きな反響を引き起こし、しばらく議論が続いた。

（蔡 文高）